

＜研究ノート＞

雲南の上座仏教

——日本における人類学・歴史学的研究の蓄積——

馬 場 雄 司

1. はじめに

パーリ学仏教文化学会第21回学術大会において、中国の研究者の方から雲南の上座仏教の紹介があった⁽¹⁾。その時、あたかも雲南の上座仏教について日本で初公開のテーマであるかのような印象を持った方もいらっしやり、私は意外に思い、同時に残念に思った。確かに日本の仏教学者による雲南上座仏教に関する研究は皆無に等しいかもしれないが、人類学者・歴史学者によるアプローチは一定程度存在している。そうした研究成果が仏教学の方々に全く目にふれていないのではないか、学際を標榜するパーリ学仏教文化学会であるはずが、分野間の交流が必ずしもなされていないのではないかと残念に思った次第である。

中国の研究者の方の報告は、新しい情報も含まれており興味深いものではあったが、日本の研究の中ですでにふれられている情報も多くあったように思う。また、この報告では、固有名詞が全て中国語表記でなされていたが⁽²⁾、日本人研究者も含め、現地調査も進んでいる現在、上座仏教を信仰する少数民族の言語で記載されるのが通常になっている。以上を踏まえ、これまでの日本での研究の蓄積の要点と課題を報告することにしたい。

なお筆者は、かつて雲南のタイ族の研究をしていたが、1990年以後、フィールドを北タイに移し、雲南から北タイに移住したタイ・ルーと呼ばれるタイ系民族の地域開発と社会・文化の変化について研究しており、現在、

とくに仏教に焦点をあてているわけでもない。そのような意味では、現在、仏教に関して大手をふって発言する立場にはないが、この方面に多少ともかかわってきた学会の会員として、報告する必要を感じ、稿を起こすこととした。

2. タイ系王国と上座仏教

まず、中国雲南省の上座部仏教について概観しておきたい。

中国雲南省の上座仏教は、特にタイ族居住地、^{シーシェアンパンナー}西双版纳タイ族自治州および^{トウーホン}徳宏タイ族チンポー族自治州を中心に、タイ族の他、モン・クメール系民族であるプーラン族やドゥアン族などが信仰している。これらの地域はミャンマーおよびラオスとの国境地帯にあたり、西双版纳タイ族自治州の中央にはメコン川が流れ、徳宏タイ族チンポー族自治州は、イラワジ川とサルウィン川に挟まれた地域に位置する。

西双版纳とは、タイ族のことばで、シプソーンパンナー（シプソーンは12、パンナーは1000の田）の音をあてたものであり、徳宏とは、タウホーン（タウは南、ホーンは怒江〔サルウィーン川〕）をあらわす。

タイ系民族は中国南部・東南アジア大陸部・インド東北部にかけて分布しているが、西南タイ諸語を話すグループの大半が上座仏教を受容しており、王国組織を形成していた。これらは、ムアン⁽³⁾と呼ばれる山間盆地を基盤とする政治的統合体の連合という形をとっていた。西双版纳には、シプソーンパンナーと呼ばれる王国組織が存在し、王が中国王朝から土司（現地首長に与えられる官職）に任命され、中心ムアン、ツェンフンと30あまりのムアンを支配していた。また、徳宏には、いくつかのタイ族土司が分立していた。これらタイ系王国は、新中国成立とともに解体し、民族自治州として今日まで存在している。

3. 日本における雲南の上座仏教研究

以下、文化人類学者・歴史学者による日本における上座仏教研究について

て、現地調査が可能となる以前、現地調査が可能になって以後、そして近年の若手による本格的研究の胎動、共同プロジェクトに分けて紹介していくことにしたい。

(1) 初期の紹介的研究

わが国で最も早く雲南の上座仏教を紹介したのは、加治である。加治は、主として中華民国時代及び新中国成立時の中国人研究者による民族誌や調査報告に基づいて、新中国成立以前の状況をまとめている。そこでは、西双版纳と徳宏の仏教組織や仏教儀礼の特色を紹介している〔加治 1972, 1988〕。1980年代には、更に様々な文献を踏まえて、長谷川がシプソーンパンナー王国の実態を明らかにし〔長谷川 1982〕、馬場が民間歌手の役割を仏教と精霊祭祀の双方にかかわるものとして分析をした〔馬場 1984, 1990〕。これらの報告には、新中国成立以前の仏教のあり方にふれられている。

(2) 1980年代以降の現地調査をふまえた研究

1980年代に雲南が外国人に開放されてのち、日本人による現地調査も進展をみせていく。とりわけ、1980年代に雲南に留学をして現地調査を行った長谷川が、現地語を踏まえて多くの報告を行っている。シプソーンパンナーに関しては、田辺の上座部仏教圏のプロジェクト（後述）の一環として、王権と仏教と精霊祭祀の関わりを分析するなかで、新中国成立以前のシプソーンパンナー王国の寺院とサンガについて明らかにしている⁽⁴⁾。ここでは、王都を中心とする寺院の序列、フーバー（長老僧）、トゥ（比丘）、パ（見習い僧）からなるサンガが明らかにされている。王都のあるムアン、ツェンフン为例にすると、王都に存在する中心となる寺院ワット・ロンは、ツェンフン全体の寺院を統括した。ワット・ロンは4つの補佐的な寺院をもち、他の寺院より卓越した位置にあった。また、ツェンフン全体の寺院が5つの管区に編成され、管区の中心寺院はワット・カオと呼ばれて一般の寺院ワット・バーン（村の寺）を管轄した。住職は、トゥもしくは、フーバーが

務め、住職にあるトゥはトゥ・ロンと呼ばれる。一般の寺院は通常トゥが住職を務めた。ワット・ロンの住職は、フーバー・ムアンと呼ばれ、王族出身者が就任した。このように、シプソーンパンナーの上座仏教は、東南アジア世界と同じく王権によって支持され、王がサンガのパトロンであった〔長谷川 1993〕。

長谷川はまた、新中国成立後の仏教にも言及しており、特に、文化大革命によって断絶した仏教が復興する1980以後の状況を報告している。そこでは、寺院での伝統的文字教育の復興がタイ族のアイデンティティーともなり、時に学校教育と矛盾が生じる点や、1980年代後半から、南国風情を醸し出す観光地として脚光を浴びる中で、仏教がタイ族のシンボルとしてクローズアップされてくる点を報告している〔長谷川 1990, 1991, 1995〕。

長谷川は更に、徳宏タイ族地区の仏教についても現地調査や近年の中国人研究者による報告を踏まえて多くの情報をまとめている〔長谷川 1996, 2006〕。そこでは、ポイツォン派、ヨン派、トーリエ派、ツォティ派の4宗派がみられ、シャン州から早くに伝えられ戒律のさほど厳しくないポイツォン派が最大勢力であることなどの特色と、サンガのあり方が西双版纳とは異なり、徳宏全体をカバーするものでなく、分立する土司勢力（ムアンの領主ツァオファー）ごとに成立していたことが報告される。徳宏北部の芒市の場合、ツァオファーの拠点に、4つの寺院があった（ツォン・セーン、ツォン・ハン、ツォン・マウ、ツォン・ホーシン）。これらは、それぞれ4つの宗派の拠点であった。4つの宗派は並列して王権の正当化にかかわっていた。こうした構造は、徳宏南端の瑞麗など他のムアンでも同じであった。芒市の場合、4つの行政区にわかれ、ツァオファーの拠点にある中心寺院が、行政区の中心寺院を管轄し、行政区の中心寺院は村落の寺院を管轄していた。また、ムアンの最高位の僧侶をファジと呼び、ツァオファーが称号を与えた。サンガ組織は、元来宗派ごとに多少の相違があったが、1982年以降、ツァオ・ジ（長老僧）、ツァオ・ツァンもしくはツァオ・モン（正式僧）、ツァオ・サン（見習い僧）に統一されている。住職には、ツァオ・ツァン以

上がることができる。

徳宏地区でも、文化大革命によって仏教は断絶し、80年代に復興しはじめる。寺院の再建が進み、また各宗派の戒律の差異の解消が試みられていった。しかしながら、僧侶の数は寺院の数に満たず、現在でも僧侶が空白でホールーと呼ぶ在家信徒の代表のみが主教活動を行う寺院もある。人々の仏教実践は、出家行動より、とりわけ、仏像を寄進して徳を積むポイ・パラと呼ばれる儀礼の活性化に向けられた。この仏像はビルマ側から購入された。復興後のサンガは、かつてのように、僧侶の組織からなり、王に聖性を付与するとともに、王によって保護されるような関係ではなくなり、サンガと政府との間をとりもつものとして政府役人と僧侶の代表からなる仏教協会が存在するようになった。

西双版纳と徳宏は、同様に上座仏教を信仰しているとはいっても、その系統や流入の歴史的背景が異なる。シプソーンパンナー王国は、北タイに存在したランナー王国と強い結びつきがあり、15世紀頃、ランナーからケントウン（現在、ミャンマー・シャン州）経由で、上座仏教を受容し、ランナー、ケントウン、シプソーンパンナーを結ぶユアン仏教圏を形成した〔馬場 1994〕。經典も、タム文字と呼ばれる共通の文字を用い、この文字を用いる文化圏は「タム文字文化圏」として知られている〔飯島 1998〕。また、徳宏の仏教は、ビルマ経由で流入したもので、ミャンマー・シャン州の仏教と共通するものが多く、文字もタム文字文化圏のものとは異なる⁽⁵⁾。

仏教の復興に関しても、西双版纳では、北タイのランプーンの寺院に僧侶を留学させるなど、北タイとの結びつきが強いが、徳宏では、ビルマとの結びつきが強い。長谷川は、西双版纳において1990年代に復興した寺院ワット・パーチエの仏教復興の役割の重要性を指摘し〔長谷川 1995〕、また、徳宏では、とりわけ最南端に位置する瑞麗（ムンマオ）のビルマのサンガとの交流がはたした仏教復興の役割に注目する。例えば、見習い僧をマングレーに留学させたり、ビルマ僧を住職として招くといったことである。瑞麗のあるムンマオ盆地は特殊な政治状況にあるという。盆地の半分が中国領で半分

がミャンマー領である。そのため、ミャンマー側のムセ、ナムカムの仏教寺院との関連が強い [長谷川 1996, 2006]。

徳宏は、その大半がタイ・ヌーと呼ばれるタイ系民族が分布しており、生活の諸側面において漢文化の影響も大きく、寺院も漢族風である。しかしながら、瑞麗のタイ族は、ミャンマー・シャン州と同様の生活様式をもち、漢化の度合いが少ない。タイ・ヌーとは、北方（ヌー）タイの意で、ミャンマー側のタイ・タウ（南方 [タウ] タイ）と区別されるが、瑞麗のタイ族はタイ・タウに含まれる [長谷川 1996]。

(3) 新世代の本格的調査

1990年代後半以降、更に本格的な調査が若い世代によって行われつつある。

西双版纳に関しては、加藤がタイ・ルー文書を様々な寺院で調査し、リストにしている。この中には仏教説話なども含まれている [加藤 2001]。イサラーは、西双版纳における、仏教復興運動が、古文字（タム文字）の復興とにも起こったことや、ワット・パーチエを中心とする公的な仏教復興と異なるローカルな仏教復興運動が、シャン州や北タイと結びついて起こっている様を報告している [イサラー 2006]。イサラーはタイ北部ランプーンのタイ・ヨーン出身者である。タイ・ヨーンとは、シプソーンパンナーよりミャンマー・シャン州ムアン・ヨーンに移住したタイ系民族をさし、その一部はランプーンに移住し、シプソーンパンナー・タイ族（タイ・ルー）と極めて近い言語をもつ。イサラーの研究は、ほぼネイティブが日本語で記述した研究として貴重なものである。

また、徳宏のポイ・パラ儀礼に関しては、現地語を踏まえた現地調査を基に、宗教の実践的側面により詳細に注目した長谷によって、詳しい報告がなされている [長谷 2007]。更に、徳宏に関しては、ミャンマーで長期間過ごし2度出家経験を持つ小島が、1年以上調査を行い、2008年の東南アジア学会第79回大会で報告を行っている。そこでは、出家者の数が少なくと

も積徳が可能な、独特な在家者主体の上座仏教の構造について述べられている [小島 2008]。今後の本格的な研究成果が期待される。

(4) 共同研究プロジェクト

これらの研究は、「雲南の上座仏教研究」として組織だてて行われてきたわけではなく、個別の関心で行われてきたものが多い。これまで、雲南の上座仏教研究がプロジェクトとして行われる場合、上座仏教圏全体を視野に納めた研究プロジェクトの一環として行われてきた。たとえば、田辺繁治の「上座部仏教社会の宗教」と称するプロジェクトによる実践宗教（経典ではなく人々の宗教実践に焦点をあてる）の人類学 [田辺 1993]、森祖道の「南方上座仏教の比較研究」 [森 1994]⁽⁶⁾、林行夫の「東南アジア大陸部・中国西南部の宗教と社会変容」 [林 2006] がある。筆者は、森プロジェクトでタイ北部のランナーからシブソーンパンナーへの上座仏教の伝播についての資料をまとめ報告している [馬場 1994]。林のプロジェクトでは、各国宗教制度のみならず、境界地域での宗教実践を視野にいれている。林はこのプロジェクト及びそれに先行する 'Inter-ethnic Relation in the Making of Mainland Southeast Asia and Southwestern China' と称する日本・中国・タイの研究者による国際共同研究において（筆者もメンバーとして参加した）、上座仏教徒社会の現実を決して均質でもなく、ローカルな実践のありかたがみられ、その背後には、様々な歴史的背景・民族間関係が存在することを指摘している [Hayashi 2002]。

4. まとめと課題

最後にまとめと課題を述べておきたい。「雲南の上座仏教」というが、歴史的な背景を考慮するとき、現代の国家の枠組みでみることは誤りである。中国・ビルマ・ラオス国境付近に分布したタイ系王国は上座仏教がその王権を支えていた。中国王朝とビルマ王朝の双方に朝貢したタイ系王国の領域は、英仏のビルマ、ラオスの植民地化により、明確な国境線が引かれ、同時

に国境の概念を明確にもつ近代中国の一部になったのである。東南アジア上座仏教の辺縁を形づくっていた雲南の上座仏教はここにおいて、中国における上座仏教となった。更に、新中国成立後、王国組織の解体、文化大革命による断絶を経て80年代に復興をとげる。ただ、中国の宗教政策により、宗教としての仏教は復興したが、迷信と位置づけられた精霊祭祀はその対象とはならなかった。また、タイ族王権にかわって政府の一機関である仏教協会が大きくかわり、北京や上海との結びつきも強くなっている。東南アジア大陸部の多くの国では、上座仏教はマジョリティの宗教であるが、中国ではマイノリティの宗教である。このような状況は、以上のような歴史的経緯でこの地域が近代中国の一部となって初めて形成されたのである。

ここでは、主としてタイ系民族の地域、西双版纳と徳宏の事例を主に紹介したが、タイ系民族以外の民族における仏教の実態は十分に明らかではない（その点で、第21回大会での中国人研究者の方の山地民族の仏教に触れた報告は興味深く感じた）。また、これまでの日本での研究は、十分な仏教学的知見のもとに仏教を正面からとらえたものでもない。しかしながら、仏教をとりまく、様々な現象について多少なりとも蓄積をしてきてはいる。今後、こうした既存の研究を批判的に踏まえて、仏教学の立場からも研究を進めていただけることを期待したい。

注

- (1) 鄭筱筠（嘉木揚凱朝訳）「中国雲南省における上座仏教の民族化の特徴について」『パーリ学仏教文化学』21, 2007, として公表されている。
- (2) 多くは、少数民族の言葉が、それに近い音の中国語表記で示されているが、中国語に翻訳した用語が用いられている場合がある。注(1)の文献においてもそのような方式で記述されている。注(4)参照のこと。
- (3) タイ国語であるシャム語、北タイ語（ランナータイ語）、ラオ語（ラオス語）ではムアンという音に近いが、雲南のタイ系民族では、ムンに近い。近年の研究では、ムンという表記が用いられることが多い（[長谷川 2006] [イサラー 2006] など）。

- (4) この内容は、注(1)の文献で紹介されている内容と重なるものである。ワット・ロンは、注(1)の文献では、洼龍（中国語音で wa long）と表記される。シプソーンパンナー・タイ語（タイ・ルー語）では、ワット（wat）は「寺院」、ロン（long）は「大きい」を意味し、王都全体の寺院を総括する寺院を意味する。注(1)の文献では、「総仏寺」という中国語訳も同時に用いられている。フーバー（xuva）、トゥ（tu）、パ（pha）は、注(1)の文献では祐巴，都，帕と表記されている。
- (5) 歴史的な事象を示す時は「ビルマ」を、現在の地名として示すときは「ミャンマー」を用いた。
- (6) 森プロジェクトは、仏教学者が中心とはなっているが、人類学者、歴史学者も含んだ学際的プロジェクトであった。したがって、ここで紹介した。

文 献

- 加治明 1968 「西南中国の傣族（擺夷）——特にその政治社会組織について」『上智史学』13
- 加治明 1972 「雲南傣族の宗教について——特に西双版纳地方を中心に——」『現代諸民族の宗教と文化——社会人類学的研究』社会思想社
- 加治明 1988 「雲南傣族の上座部仏教」『東洋研究』85
- 長谷川清 1982 「Sip Song Panna 王国（車里）の政治支配組織とその統治領域——雲南傣族研究の一環として」『東南アジア——歴史と文化』11, 平凡社
- 長谷川清 1990 「タイ族における民族文化の再編と創造」『文化人類学』8, アカデミア出版会
- 長谷川清 1991 「『伝統』の改革——タイ族の文化変化をめぐって」『聖徳学園岐阜教育大学紀要』21
- 長谷川清 1993 「雲南省タイ系民族における仏教と精霊祭祀」『実践宗教の人類学——上座部仏教の世界』（田辺繁治編），京都大学学術出版会
- 長谷川清 1995 「『宗教』としての上座仏教——シプソーンパンナー，タイ・ルー族の仏教復興運動とエスニシティ」『宗教・民族・伝統』（杉本良夫編），南山大学人類学研究所
- 長谷川清 1996 「上座仏教圏における『地域』と『民族』の位相——雲南省，徳宏タイ族の事例から——」『総合的地域研究』26, 京都大学東南アジア研究センター
- 長谷川清 2001 「観光開発と民族社会の変容」『現代中国の民族と経済』（佐々木信彰編），世界思想社
- 長谷川清 2006 「中国・ミャンマー境域における宗教実践とローカリティの再創出——徳宏州，ムン・マオ（瑞麗）の事例研究」『東南アジア大陸部・西南中国の宗

- 教と社会変容——制度・境域・実践——』（科研費報告書・代表・林行夫）
- 馬場雄司 1984 「Sip Song Panna の民族詩人賛哈について——雲南地方における文化複合の一形態として」『東南アジア——歴史と文化』13, 平凡社
- 馬場雄司 1990 「雲南タイ・ルー族のツァーン・ハブ——歌（ハブ）を専門とする職能者の諸相」『職能としての音楽』（藤井知昭・馬場雄司編），東京書籍
- 馬場雄司 1994 「雲南，シプソーンパンナーと北部タイ，ランナーのランカーウオン受容に関して」『南方上座仏教の展開と相互交流に関する総合的研究』（科研費報告書・代表・森祖道）
- 長谷千代子 2007 『文化の政治と生活の詩学——中国雲南省徳宏タイ族の日常的実践』，風響社
- 小島敬裕 2008 「中国雲南省徳宏地域におけるタイ族の上座仏教——在家信者中心の実践をめぐって」（東南アジア学会 第79回研究大会報告）
- イサラー・ヤナターン 2006 「タイ族知識人のムンの「歴史」——シプソーンパンナーのムンロンの事例——」『年報タイ研究』6
- 加藤久美子 2001 「シプソーンパンナーにおけるタイ・ルー文字写本の状況」『中国・ラオス・タイにおけるタイ・ルー族史料の研究』（科研費報告書・代表・加藤久美子）
- 飯島明子 1998 「ランナーの歴史と文献に関するノート——チェンマイの誕生をめぐって」『黄金の四角地帯——シャン文化圏の歴史・言語・民族』（新谷忠彦編），慶友社
- Hayashi, Yukio 2002 “Buddhism behind Official Organization: Note on Theravada Buddhist Practice in Comparative Perspective”, ‘Inter-Ethnic Relation in the Making of Mainland Southeast Asia and Southwestern China’, edited by Hayashi Yukio and Aroonrut Wichienkaeo, Center for Southeastern Studies, Kyoto University.
- 姚荷生（多田狷介訳）『雲南のタイ族——シプソーンパンナー民族誌』刀水書房（原文中国語，『水擺夷風土記』）
- 田辺繁治 1993 『実践宗教の人類学——上座部仏教の世界』京都大学学術出版会
- 森祖道 1994 『南方上座仏教の展開と相互交流に関する総合的研究』（科研費報告書）
- 林行夫 2006 『東南アジア大陸部・西南中国の宗教と社会変容——制度・境域・実践——』（科研費報告書）